

4年間で一生につながる財産を

矢野建一 学長

専修大学での4年間は学生にどんな変化をもたらすのか。
専修大学の教育における伝統と革新とは。
今年度からスタートした「新たな学士課程教育」の
意図するところを含めて、矢野学長にお話をお伺いしました。



1949年長野県伊那市生まれ。72年専修大学文学部卒業。80年立教大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士。92年専修大学文学部助教授。98年教授。文学部長(2006～10年)などを歴任。2013年9月より専修大学学長。専攻は日本古代史、日本文化史。近著は、共著『遣唐使の見た中国と日本』(05年、朝日新聞社)、共編著『長安都市文化と日本・朝鮮』(06年、汲古書院)

◆ 専修大学で殻を打ち破る

—— 矢野学長が専修大学の学生に期待されることは何でしょうか。

学生には大学の4年間の中で、一生涯につながる財産を獲得していつてもらいたいと思っています。学業にしても、スポーツにしても、大学ではいろいろなチャレンジの仕方があると思いますが、情熱を燃やせる何かをつかみ取ってほしいです。

専修大学の学生はまじめで堅実、これは世間の評判の通りのところでもあります。その裏返しに地味で、引っ込み思案なところもあるように思います。チャレンジを通して、その殻を大学の4年間で打ち破ってほしいと願っています。

この思いは、私自身の学生時代の体験に根差しています。私は信州信濃の雪深い田舎から出てきましたから、専修大学入学当初は口も重く、内気なところがありました。しかし、それを破ってくれたのはゼミの松本新八郎先生、そして仲間たちでした。私の学生時代は、ゼミに情熱を注いだということになります。

—— 矢野学長は文学部人文学科(歴史コース)の創立3年目に入学されましたが、そこでの教育・指導はどのようなものでしたか。

先生方の新しい学部づくりと教育にかける情熱は並々ならぬものがあり、指導は非常に厳しいものでした。ゼミについていえば、1カ月前から図書館にこもって研究を整理し、問題点を抽出し、史資料を

捜索して万全の態勢で報告に臨みました。しかし先生の鋭い質問の前には全く歯が立たず、なかには円形脱毛症になる友人も現れました。現代の学生ですと逃げ出してしまうかもしれません。

しかし厳しさの一方で、先生は学生の面倒もよく見てくれました。博物館や史跡へと学生を連れ出し、ときには一般参観者の立ち入ることのできないところまで先生の「顔」で案内していただき、本物を見せてくれました。背中を押し、手を引っ張ってくれた指導が、地方出身の18、9歳の私に、史学を面白いと感じさせ、夢中になっていくきっかけを与えてくれたのです。

このような教育のあり方は今も同じで、専修大学には日常的にゼミや授業の中にもチャレンジする場があり、学生が様々な啓発を受ける環境が整っているといえるでしょう。

—— 矢野学長ご自身もゼミを担当されていますが、教員として学生に伝えていることはありますか。

歴史を学ぶ学生には、「通説を疑え」ということを伝えています。これは私が学生時代に培ったものの見方です。文献をそのまま受け入れるのではなく、批判的に読むという“テキストクリティーク”の精神は、学生時代に徹底して教え込まれたものです。学生には、通説に疑問を持った場合には、その根拠は何かというところまで突き詰めるように指導しています。これは歴史を学ぶ面白さでもあると思います。

◆ 専大の伝統と革新が息づく 「新たな学士課程教育」

—— 専修大学の教育の特徴を教えてください。

「先取先進性」、そして「教育が丁寧である」ということがいえると思います。専修大学は今年で創立135年を迎えます。専修大学が創立した当時、西洋から入ってきた新しい学問は、外国語で講義するのが当たり前でした。それをアメリカで学問を修めた相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人の若者が中心となって、社会の礎となる人材を育てるために、法律と経済を日本語で教える、誰もが学べる大学をつくりました。

こうした時代のニーズをすくいあげる「先取先進性」と、誰もが学べるという「教育の丁寧さ」の伝統は、今年度から導入した「新たな学士課程教育」にも生きています。

—— 「新たな学士課程教育」の狙いはどのようなところにあるのでしょうか。

現在、少子化が進み18歳人口は緩やかに減少しています。一方で大学進学率は50%を超え、専修大学にも多様な学生が入学してきます。そうすると、何を学ぶかを十分に考えないまま入ってくる学生もいます。そういう学生にとって大切なのは、学ぶことの動機づけと、高校までの考え方からの脱却です。

今年度からスタートした4領域・3層構造からなる「新たな学士課程教育」では、まず入学後、半年間の「転換教育課程」で、大学で学ぶことの意義、レポートの書き方や発表の仕方、本学の歴史や建学の精神などについて学びます。そしてそれに続く「導入教育課程」で、基礎統計学やキャリア教育関連科目、情報リテラシー関連科目、基礎自然科学など、どんな学問をするうえでも必要になる基礎的な知識を修得します。これらは教養、専門へ入っていくためのジャンピングボードといえるでしょう。

そうしたベースを身に付けたうえで「専門教育課程」と「教養教育課程」を学ぶわけですが、自らの専門分野を深く掘り下げるとき、なかにはこれは自分がやりたいことなのか、と疑問を持つ学生もいます。「新たな学士課程教育」では、こうした学生にも対応し、多くの大学のように専門と教養を上下に配置するのではなく、横に並べたうえで両者を繋ぐ「融合領域科目」を設け、広い視野から専門の学問を見直し、その意義を再発見できるようにしています。

カリキュラムを時代の要請に合ったものに変えるにあたり、学内においても激しい議論を重ねました。その結果導入された「新たな学士課程教育」によっ

新たな学士課程教育



て、専修大学の良さをもっと発揮でき、学生たちをより開かれた世界に向けて巣立たせることが可能な体制が整ったと考えています。

◆ 大学に力を与えてくれる育友会

—— 学生の父母・保護者の会である「育友会」は今年で、創立56周年となります。

専修大学は財閥や宗教団体など、ある特定の団体の後ろ盾があるわけではありません。在学生、卒業生、教員、職員とご父母・保護者の力によって、これまで存続してきました。

戦争により東京が焼け野原になった中、かろうじて焼け残った神田校舎から復興を果たし、1949年（昭和24年）の新学制への移行においては、専修大学発展のために新制大学の実現を図るべきと全学が丸一となって決起しました。

専修大学はいつも五者の連携を持って歴史を刻んできており、ご父母・保護者の会である育友会にも多大な力をいただいています。

—— ご父母・保護者へのメッセージをお願いします。

専修大学は、「学生を基本に据えた大学づくり」を進めています。専修大学の4年間で学びとったものが、一生の財産になるようなものであってほしいと願っています。それは知識の量ではなく、ものの考え方であり、これは専修大学の掲げる21世紀ビジョン「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」に集約されます。

社会に出れば困難に直面することはいくらでもあると思いますが、そのときどのように問題を見つけ出し、解決していくか。その力を4年間で、学生にしっかり植えつけることが大学の任務であると思っています。

専修大学ではそのためのさまざまな教育プログラムを用意しておりますので、ご父母・保護者の皆さまには安心して、ご子女を見守っていただけたらと思います。